医事・文談　九百八十四

《正岡子規（36）の続き》その272
子規周辺の人びと（二十二）

平岸　三八

日本では古来、海水を浴びるなどという風習はなかったようだ。水練と称して、川や海での武術の一種としての水泳術があった。それにも諸流があった。

従って海水浴は外国からの伝来と考えられ、御雇医師のベルツの主唱により始ったのではないかと、小生は考えていた。

ところが百科事典を検したところ、そうではないことが記載されていた。

明治14年（一八八一）、愛知県立病院長・後藤新平が、医療的効果を説いて、愛知県千鳥ケ浜に海水浴場を開いたのが始めであり、次いで同18年（一八八五）松本良順が神奈川県大磯に開いたとあるのである。

後藤は後年政治家になったが、施策や規模の広大さに世人は「大風呂敷」と評したが、のちになってその正しいことを認めるようになった。

内務省衛生局長に任じられ、労働者の衛生に注目し、「職業衛生法」を著し、明治28年、日清戦争による戦地帰還兵の検疫の急務を建言して、臨時陸軍検疫事務官長に就任し、その後の各戦役の検疫業務の魁をなした。後藤の生涯と、仕事については、本稿（五百三）以降に述べたところである。

後藤の仕事が、個人衛生と公衆衛生の両方に跨っていることは、明治14年に既に個人衛生としての海水浴に着目していることから分る。同15年には、横浜・本牧海岸で外国人の海水浴が流行したと『明治・大正家庭史年表』（二〇〇〇年3月河出書房新社発行）にあるから、三潴や山崎の著作はそれらを参考にしたのかもしれない。日本古来の潮干狩りは、潮のひいたあとの浜べで魚や貝をとることが主目的で、それも主として女、子どもの遊びで時季的にも春さきで、潮浴びには不適であった。

後藤にしろ、松本にしろ、医師として健康増進を目的としての海水浴奨励であった。三潴も山崎も健康のために、海水浴が適していると認め、外国人が盛に行うのを見て、指導書を著したのであろう。

漱石が友人らと、子規を見舞いの帰途、山崎医師を訪い、子規の病状を問うたのに、在宅しながら取込と称しそれに応じなかったことは既述した。

「取込」が来客でもあったのか、診療中だったのか、或は身内に不幸でもあったのか、或は書生っぽが何人かで来てウルサイことだと会わずに、取次を介して答えさせたものだろうか。

それに対し漱石は、山崎を不注意、不親切な医師と、口を極めて罵っている。

しかし友人の同期生と協同で、海水浴という新しい文化かレジャーに関する書物の出版を心がけたのは、なかなかの人物だったのではなかろうか。

この書物が、古書目録でいくらの値段がついているか知りたい方もいらっしゃると思う。ソットお教えする。実は八、四〇〇円である。今から百年前の海水浴に関する本としては、まず妥当な値段かもしれない。書店では、子規や漱石に関係のある人物の著作ということで、やや高価な値をつけたものか。

少々気張れば、小生にも入手できない値段ではないが、遠慮することとしよう。

なお山崎医師は、マルシャス・ウイルソン『歴史哲学』の出版者でもあると『子規選集第14巻　子規の一生』（和田克司編（株式会社増進会出版　二〇〇三年九月二十日）に載っている。出版者とあるが、翻訳者だろうか。マルシャス・ウイルソンについては、知るところがないが、医学書以外の書物（それも外国人の）を出版しているところから推すと、山崎は相当な学識者ではなかろうか。

漱石と共に子規を見舞い、山崎医師を訪れて病状や養生法を問うたのは、米山保三郎と龍口了信の二人である。

米山（一八六九―九七）は、明治26年東大哲学科卒。円覚寺管長の今北洪川から天然居士の号を受けた。非常な秀才で、将来を嘱望されながら、腹膜炎で夭折。第一高等中学校（予科）時代、建築家志望の漱石を文学者となるよう説諭した人物として知られる。瀧口は明治27年東大国文科卒。

米山については次号以下に述べる。